釧路地域における美術教育の課題把握と教育開発

福江良純
（北海道教育大学 釧路校）

Development of educational contents under perception of problems in the art education in Kushiro area.

Yoshizumi FUKUE

はじめに

釧路市が位置する道東地区には、マンガ的な美術教員の不足という課題が意識されて久しい。そこには、平成18年度の本学の改組によって、釧路校から中学美術免許を持つ教員が輩出できなくなったことも要因の一つである。そのような状況下で、釧路市内であっても美術教育の「免許外担当」が常態化している中学校も少なくない。

免許外担当、そもそもとりわけ学区の場合、事の本質は大学の人材の育成体制の問題ではなく、教育機関における美術教育観にあると言っても過言ではない。教育目標は個性の伸長を理想に掲げることが、一方、現実的には学力向上に効果を置かざるを得ない現状の実情があるからである。

本研究は、釧路管内の学校教育における美術教育の現状に鑑みつつ、そこから浮かび上がる美術教育の一般認識の問題点について考察していく。そして、これまでの研究者による公開講座や中学校との連携事業などの紹介を通じ、普通教育としての美術教育の新しい展開についての提案をする。

1．道東と釧路地域の美術教育

釧路市は、道東の政治経済の中心として、釧路地方裁判所や釧路鉄道総合振興局等、道東地方を管轄する国や道の出先機関を擁する道東の基幹都市である。また、国内有数の水揚げ高を誇る釧路港、製紙工場や食料品工場、医薬品製造工場などを持つ臨海工業都市であり、市人口は道内で第4位の18万人である。加えて、市郊外域の釧路湿原や阿寒湖は国際的な観光地として名高い。

また、文化面では、釧路市内には市立の美術館および道立の釧路芸術館が置かれ、無数の施設を跨ぐように掛かる幣舞橋には、その欄干に立つ4体の彫像が市の象徴的なイメージを構成している。4体の彫像の作者のうち、《夏》の佐藤忠良、《冬》の本郷新一らは北海道出身の作家であり、さらに、日本近代彫刻史上の重要人物である中原恪二郎が釧路の生まれであるということに至っては、道内における釧路の文化的背景の豊かさを示すものである。

しかしながら、近隣町村から構成される釧路支庁管内を指す釧路地域の地理的な広域性に鑑みながら、文化的な社会資本および教育事業の充実にはあまりの程度を欠いている。それはいはや、美術教育のための社会的資本が釧路市に集中し、それらが学校教育との関係で十分な広域に及ぶ機能を果たしていない現状があるためである。

釧路市を除く釧路地域に位置している学校は、殆どが他地域指定校である。べき地の多くは、授業時間数の少ない美術科に専任教員を配置しており、積極的な美術教育の展開が困難となっている。ただしこれは、実はべき地域の現実である以上に、釧路地域の美術教育と社会資本の問題でもある。

2．べき地校教育と美術教育

北海道全体では、約700校の小学校と約400校の中学校がべき地校である[1]。釧路地域のべき地校は小学校37校、中学校25校で、北海道全体の約5,6%に相当する。これらを釧路地域に限ってみると、釧路地域には小学校、中学校合わせて106校であるからおよそ60%がべき地校ということになる。

べき地校の中学校における美術教員の配置は7人であり、べき地校全体の3割に満たない。この配置に学校教育における美術の認識が表れている。これは他でもなく3学級9定数[2]の中で、優先される教科の序列における美術の位置を表している。つまり、今日的な学力観の下では美術は学力伸長に対する有効性が評価されていないのである。

べき地小規模校の教育環境の特質として一般に言われている中に、次の事柄がある。まず、自然体験学習を初めとして、体験学習をカリキュラムに組み込みやすい。教師自身は、多面的な役割を担う必要があるゆえ、市街地の学校よりも早く成長できる。

その一方、べき地校の最大の弱点は生徒数の少なさである。これは一層、特徴であるが、「競合」する必要のある多くのジャンルでは、少人数は基礎的な条件（例えば、チームスポーツの構成員数）を満たさない場合もある。学力も、一般には進路実現を可能にするものと捉えられており、ここにも競合という問題意識は避けては通れない。

- 47 -
もちろん、美術は決して競争概念に準じて発展するものではなく、その意味においては、べき地校の環境は美術教育の教育効果を高く発揮できる素地がある。しかしながら、学校が普通教育の教育機関である以上、そこには教育内容の実現を保証する専門教員の存在は欠かせないはずである。べき地校における美術教員の配置数の現状は、この最低限の条件を満たしていない。こことは、現代社会が要請する教育機と美術教育の理念との隔たりが浮かび上がるとある。

すなわち、べき地校における美術教員の実態は、べき地校の環境を積極的に活用する以上に、地域格差を学力の格差の問題として対処していることを表してはないだろうか。しかしこ果たして美術は学力伸長に寄与していないものなのであろう。文化や芸術を推進発展させる能力と創造性は、学力と無縁の能力ではないはずである。

美的な分野における創造性能力自体も数値化され難しい問題であるが、この能力と学力の関係については、美術が普通教育で取り組める以上は検証すべき事項であろう。もっとも、べき地校は学級数の少なさは、もとより授業時間数の少ない美術の専任教員を配置しにくい条件である。ただし、べき地校における美術教員の配置を詳細に調えていくなら、その配置には市町村間の格差の方が大きいことが分ってくる。つまりはさらに、べき地校を抱える周辺市町村とべき地校の美術教育を比較検討するとき、もっとも美術教員が手薄になっているのは、最も学級数の多いべき地校の市町村であることが浮かび上がってくる。

3. べき地域の美術教育と地域格差

べき地域の中学校は6市町村41校である。この内陸地域指定を受けているものの特別指定を含め25校である。べき地域全体で、美術教員（時間付き講師、時間講師、産学合同）を配置している学校は17校。そして、その中に含まれるべき地指定校はわずか6校にとどまっている。これを一般校とべき地校ごとの美術教員を率で置き換えると、一般校は69%の充足率であるのに対しべき地域は24%とされる。

つまり、べき地域の半数以上がべき地校となっているに拘わらず、美術教員はその総数の三分の一しか割り当てられていないことに分からざるを得ない。このことは何を物語っているのか、また、このことから我々は何を考察すべきなのか。

中学校では美術科は義務教育としての教科教であり、上記数値を返すなら、一般校では3割台にとどまる英科の免許外担当がべき地校においてはそれに2倍以上の7割を超える学校において免許外担当がなされていることになる。小規模校であれば美術の授業時間数が少なく、美術科教員免許を所有する教員よりも適当以上の授業時間数の多い教科の教員が優先的に配置されるのは当然の処置と言えるかもしれない。しかし、実際の美術教員の配置は、時間数に応じてなされていない。

べき地域の美術教員の配置を市町村毎にまとめて比較すると興味深い格差が浮かび上がる（表1）。

表1 べき地域内市町村別美術教員等一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>市町村</th>
<th>学校数</th>
<th>学級数</th>
<th>美術教員数</th>
<th>免許外担当</th>
<th>免許外の割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>べき路町</td>
<td>4</td>
<td>29</td>
<td>(1)</td>
<td>期限制時制</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>厚岸町</td>
<td>4</td>
<td>22</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>浜町</td>
<td>5</td>
<td>21</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>橋町</td>
<td>6</td>
<td>21</td>
<td>2(1)</td>
<td>期限制時制</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>弟子町</td>
<td>2</td>
<td>12</td>
<td>0</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鳥居町</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>(1)</td>
<td>非常制時制</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>白鳥町</td>
<td>3</td>
<td>14</td>
<td>0</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>べき路市</td>
<td>15</td>
<td>162</td>
<td>9(1)</td>
<td>期限制時制</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

べき路市には10人配置される美術教員が、べき路市以外の各市町村合わせて7人である。両者の学級数に対する美術教員数の割合はわずか1%の差に過ぎず、べき地域全域を抑えた場合の教員配当率に差はない。しかししながら、べき路市では美術教員が支援免許を担当せしめ美術科の指導を外していったり、産業体験中であったりなど、実質美術の授業を担当していないケースが数多い。つまりは、学校単位でなされる教育の実情に即したとき、べき路市とその他の地域の差として予想されるのは、美術科の免許外担当の実態である（表3）。

表2 べき路市と周辺町村の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th>市町村</th>
<th>美術教員数</th>
<th>免許外担当</th>
<th>免許外の割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>べき路市</td>
<td>9(1)</td>
<td>5</td>
<td>33%</td>
</tr>
<tr>
<td>べき路市以外</td>
<td>4(3)</td>
<td>19</td>
<td>72%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

べき路市以外では7割、べき路市内でも3割の学校で美術教員の免許外担当がなされている実態を示す。両者には4ポイント近い差が見られる。しかしながら、べき地の特殊な要因を形成している要因を検証する時、ここから読み取るべき内容は、単なる地域格差ではないことが分かってくる。

4. べき地とべき路市の免許外担当

べき地校の指定は、交通条件及び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間地、離島その他の地域に対し等級を附してなされるものである。べき路市以外のべき地校において美術の免許外担当が5割を超える学校で常態化していることは、教育の機会均等の理念に照らして、あってはならない事態である。べき地教育振興法が、べき地における教育の特殊事情に鑑み、教育の機会均等を保障
する教育施策を推進する目的を持つものなら、教科教育間の格差も改善されなくてはならない。

べき地域域と釧路市内をその割合で比較するなら、免許外担当の事情は、べき地域域に大きいのかのように映る。しかし、普通教育科目がその免許を保有する教員の責任において担当されていない事態は、単に教員の不足や通勤移動距離の問題を超えて、義務教育としての特殊事情として広く捉えるべきものである。特に、文化施設に恵まれている釧路市内にあって、特定の学校に免許外担当が常態化している現状には、認識すべき特殊な事態が深遠とも言える。

次は、釧路市の文化事業を概観し、それらを連携する形で研究者が展開した釧路市内の中学校との連携事業を紹介し、美術教育の一つの形を提案したい。

5. 提案1：中学校との連携事業

釧路市市街地にありながら、美術教員が配されていない中学校は市立舞中学校と市立春採中学校の2校である（表3）。

また、美術教員を配置する釧路市の中学校の中、べき地指定を除いて学級数を10を切る釧路市の中学校は、表4の他に大満中学校（学級数9）、桜ヶ丘中学校（学級数8）がある。ただし、桜ヶ丘中学校の美術教員は、平成26年度は支給学校で担当となっている。これらの釧路市内の小規模校のうち、ある面で最も特性のあるのが美術中学校である。次に、これまでの筆者と舞中学校の美術教員との連携を通し、必要に応じて、免許外担当およびべき地教育の問題を考察してみたい。

釧路市市立舞中学校美術部と、顧問の小原憲教諭の熱心な取り組みによって、筆者が北海道教育大学釧路校に着任した平成25年度末、最も交流の深かった中学校であった。舞中学校の校区には住宅地が多いが、平成26年度時点でクラス数10、生徒総数230人の規模は、べき地を除く釧路市内の中学校の中では最も小規模な学校の一つである。だが、校区の特徴として、小・中・高・大の各学校や図書館、博物館、埋蔵文化センター、生涯学習センターなどの関連施設がある釧路市随一の文教地区であり、教育環境に恵まれていることが重要である。恵まれた立地条件にある舞中学校は、その意味ではべき地の対極とも言える。しかしながら、美教員の不在はせっかくの文化社会資本の有効活用を鈍らせることにもなりかねない。幸い小原教諭は、舞中学校の連携を生徒のために生きる姿を懐かなかった。次により、舞中学校が関わった各種美術教育事業を紹介し、釧路市内外のべき地教育について考察する。

5.1. アートスクール事業（釧路市立美術館）

アートスクールとは、釧路市立美術館が釧路管内の学校に対して開いている、企画展の鑑賞教育プログラムである。学校が遠方の場合は美術館のバスによる送迎も行われている。この事業には、美術館から派遣を受けた平成25年度の統計では、舞中学校が美術部名5回、その他の団体名で1回の計6回という参加実績がある（表4）。

表4 アートスクール 釧路地域中学校実績

<table>
<thead>
<tr>
<th>学校名</th>
<th>級数</th>
<th>回数</th>
<th>人数※</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>釧路市立舞中学校</td>
<td>10</td>
<td>6</td>
<td>90</td>
<td>美術部 pruning</td>
</tr>
<tr>
<td>釧路市立美中学校</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td>57</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>教育大学</td>
<td>10</td>
<td>2</td>
<td>105</td>
<td>鑑賞教育</td>
</tr>
<tr>
<td>釧路市立北中学校</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>16</td>
<td>特別支援学級</td>
</tr>
<tr>
<td>釧路市立桜ヶ丘中学校</td>
<td>12</td>
<td>3</td>
<td>15</td>
<td>借出教室</td>
</tr>
<tr>
<td>樹蔭町立桜ヶ丘小中学校</td>
<td>10</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>中学校美術科の願う</td>
</tr>
<tr>
<td>樹蔭町立舞中学校</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>学生が学び、学習</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※参加回数は同一の場合は毎日に集計している。

この表からは、舞中学校における美術の活用は課外活動によるものが半数以上を占め、つまり授業活動における美術の有効活用は大きいといえることが分かる。なお、べき地校3校にはいずれも美術教員が配置されていない。

5.2. 公開講座の活用

釧路市立美術館では、一般向けの公開講座に他、冬休みや夏休みなど、学校の休業に合わせた児童生徒対象の各種公開講座を開催している。筆者が釧路校に着任した平成25年度以降、美術館との連携で行った公開講座のうち、舞中学校美術部が参加したものは以下の2つである（表5）。

表5

<table>
<thead>
<tr>
<th>年月</th>
<th>講座名</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成25年8月</td>
<td>彫刻体験講座</td>
<td>「友達との顔を作ろう」</td>
</tr>
<tr>
<td>平成25年12月</td>
<td>釧路市立美術館公開講座</td>
<td>「木彫講座オリジナル作品を作ろう」</td>
</tr>
</tbody>
</table>

小枝を使った木彫り造形
このうち、「友達の顔を作ろう」は、一般参加者も含めて実施した講座を、その評判を聞いた小原氏が独自に美術館に問い合わせをして、改めて幣舞中学校美術部単独参加で開いたものである。また、木彫講座は、中学生にとって、これまで木版画制作以外に使ったことのない彫刻刀などの刃物を、初めて立体造形のために使うものであった（図1）。

図1 「木彫講座 オリジナルサンタを作ろう」

五．三．大学施設見学と造形体験
平成25年度に公開講座を通じてできた感興をもとに、平成26年度は、美術部との直接的な連携事業ができた。

顧問の小原教諭から、生徒たちに大学の実習室などの施設見学をさせてもらえるかという申し出を受けて、平成26年5月23日（土）に大学の工房にて「木彫教室」を実施した。この日は、大学の正門玄関に集合し、芸術グループの関連施設や学生の共用スペースなどの学内設備を見学（図2）。それに続いて共用実習棟で木彫りの制作体験を行った（図3）。

図3 制作体験

寒潮の森林を保全する（一財）前田一歩開発財団との連携事業「間伐材活用プロジェクト」で提供を受けた柳の小枝を使用した。また、小枝のフクロウの制作手法は、阿寒湖温泉のアイヌカタで木彫り工芸店「エポエポ」を営む森田恭氏から教示いただいたものである。

図2 学内見学

この課題の設定には、スペ地教育から美術教育の有機的連関を実現する狙いがある。地域の課題を格差として捉えるのではなく、特質として捉え教科として生かす。美術教育の教育内容の開発は、スペ地そのものに新しい光を照射するものである。

図4 旧手法（左）と新手法（右３つ）

６．提案２：釧路市における教育開発
幣舞中学校との連携は、11月にも行われた。第2回目も、同じ柳の小枝を用いたフクロウ制作であったが、今回は、新開発の立体制造形手法を採用した（図4）。

体験内容は、オープンキャンパスでも体験授業として行いた、小枝から作るフクロウである（図4）。この小枝は、阿
小枝を綾割りして、その角を正中線に当てはめる造形は、
円空仏像に多用されている木彫りの一手法である。筆者ら
は、この造形法の仕組みを、サント人形（図5）で教材化
し、授業や公開講座に取り入れてきた経緯がある。フクロ
ウの彫り物は、サント人形の手法をフクロウの形態イメー
ジと調和させ、方法的に整理することで誕生した。

図5 サント人形

木彫講座で扱ったフクロウなどの教材には、釧路地域に
おける特殊性を教育内容に転化し生かす目的で、いくつか
の要件を集約している。

1. 地域の素材を活用する
2. モティーフの地域性
3. 素材を巡る地域の文化と産業

1. 素材活用は、美術の基本的な事柄と言える。昨今の
環境問題に関する民気の高揚から、廃棄されるものを美術
教材に活用傾向が盛んである。ここには功罪がある。廃品
を教材に活用することは、材料のコストを無くし、かつ「不
要なもの」に対する反省的態度を涵養することにもなる。
ただし、純粋に材料のリサイクルの観点に立つと、造形化
はリサイクルの連続性を断ち、結局はゴミを生み出すこと
に繋がる。そして最も懸念されるのは、良い素材との触れ
合いの機会を奪い、そのことが再生産されないものを尊重
する意識の育成を阻むことになっているのではないかとい
うことである。そして、石でも、木でも、天然の素材の良
さは、それが地域という特殊性と不可欠なことである。

2. フクロウはクマを並んで北海道の木彫り芸品でも
多く採用されるモティーフであり、郷土愛ともいうべき情
操を育むものと言えるだろう。広く文化を学ぶ以前に、
地域の文化が始めてきたモティーフを知ることは重要であ
る。

3. とりわけ、釧路地域には、アイヌ文化の継承と発展
を生業として成り立たせる目的のアイヌカタ（阿寒湖温
泉）がある。もっとも、アイヌカタは観光資源であり、
本来、教育資源ではない。しかしながら、アイヌ文化は釧
路地域の文化の柱であり、その一端をその地域の素材をもっ
て学ぶことは、人命の足元から知る作業と言える。こ
の作業は、今ここにあるということの目覚めの一助ともな
るはずである。

おわりに

へき地校には「教育の原点」という評価がなされること
もある。その一方で、法令では、へき地校を「交通条件及
び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間地、離
島その他の地域に所在する公立の小学校及び中学校」と定
めている。この「評価」と「制定」、二つの隔絶を我々はど
う理解すべきか。

問題は「文化的諸条件に恵まれない」をどう解釈するか
である。へき地校が「教育の原点」というべきものが機能
するなら、教育はその原点に立って為されるべきである。
この原点を起点として諸条件を考えなくてはならないので
はないだろうか。もし、文化施設などの社会資本に乏しい
地域であれば、その活用手段を講じなければならない。同
じことは、へき地校以外にも言えるのであって、例えば舞
舞中学校のように、高いレベルの文教地区にあっても、教
員個人の献身性に依存する教育体制は脆弱と言えるだろう。
つまりは、「文化的諸条件に文化的条件を想定していないと
いうことでもある。釧路市の学校教育の免許外担当が常態化している現実からは、教育理念の歪みも
読み取るべきではないだろう。そしてそれは「教育の原
点」という、へき地校のロケーションに対する認識の問題
である。

美術教育とは「感性の教育、人間教育」とも言われるが、
それは「美をとらえるのか」だからである13。逆に言え
ば、美術は「心の教育」としての感性教育であり人間教育
なである。しかし、美術も心を生かし教え伝える
個々の新たな教育活動を機能させる教育システムが重要な
のは言うまでもない。へき地校と免許外担当が常態化して
いる学校の現状からは、「教育の原点」が人、それも教師に
あることが浮かび上がる。

謝辞：本論文を執筆するためにあたり多くの方々にお世話になっ
た。特に、舞舞中学校教育小原原氏には直接ご教示をいただ
くことが度々であった。また、舞舞中学校美術部の皆さん
とのひと時をもとに、本稿はようやく成ったものである。
ここに謝意を表する。

注
注1 「へき地学校」とは、交通条件及び自然的、経済的、
文化的諸条件に恵まれない山間地、離島その他の地域
に所在する公立の小学校及び中学校並びに中等教
育学校の前期課程並びに学校給食法（昭和29年法律
第160号）第5条の2に規定する施設（以下共同調理
場）をいう。（へき地教育振興法第2条）
注2 教職員定数の配置並びに学級編制基準（平成3年3月8日北海道教育委員会決定）
注3 北海道教育関係「職員録」、2014年度版（北海道評論社）を参照して作成。
注4 ここで、免許外担当が想定されるのは、前掲職員録手掛かりに、美術科免許を所有する臨時講師を採用していない学校及び、免許所持者が支援学級などの担当となっている学校を除く学校である。釧路地域の教科の研究会組織も、各学校の実情に即した免許外担当の実態を把握しておらず、年度ごとの正確な状況把握は今後の課題と言える。
注5 へき地教育振興法施行規則第3条に、へき地学校などの細数指定基準が定められている。
注6 この考えは、信州に大きな教育業績を残した彫刻家石井鷹三が、昭和25年長野県下伊那郡で群北部支会の図画研究会で児童・生徒作品展示品の講評で示したものである。『馬に夢を乗せて－石井鷹三の生涯－』、小県上田教育会、2001。pp.120-124。

参考文献
『教育小六法』平成27年度版、学問書房、2015。
『馬に夢を乗せて－石井鷹三の生涯－』、小県上田教育会、2001。
『北海道教育関係職員録』、2014年度版、北海道評論社。